

移り行く京ことば

関西外国語大学大学院教授
新村出記念財団理事長

堀井 令以知



「上ル、下ル、東入ル、西入ル」で示される地域が「京ことば」エリア

私は本を書いたり講演をしたりする時は、「京都語」あるいは「京ことば」という術語を使ってお話をします。京都は王城の地。京都の人は恐らく全国一、自分の土地の言葉に対してプライドを持っていますので、それだけ誇り高い地の言葉なのだということを、ご承知おきいただきたいと思えます。

さて、京ことば、京都語といいますが、どの範囲で話されていた言葉を目指すのでしょうか。ひと口で言いますと「上ル、下ル、東入ル、西入ル」という表示で表される地域。つまり昭和4（1929）年より前の京都市内で、当時たった二つしかなかった区。ほぼ今の上京と下京の一带と見て、まず間違いはないでしょう。中心は四条河原町付近です。鴨川の東側など、むかし郡であったところ、たとえば百万遍の人は「京へ行く」と言いました。鴨川を越えて中心部へ行くことを「京へ行く」と言ったものです。

その中でも、各地域によって言葉の差が出てきます。中心となったのは、まず何といつても京都御所の言葉。ずっと明治維新まで話されてきた言葉です。その伝統ある京都の御所の中で話されていた言葉があれば、舞妓さんや芸妓さんが話している花街の言葉、祇園を中心にする祇園ことば、祇園祭で有名な室町の間屋街の商人の言葉、西陣織で有名な西陣の言葉もあります。総合的に見て、これらも京ことばの範囲に入りますが、地域ごとに違ってきます。

昭和4年以前の京都市で話されていた言葉は、こんにち随分

変遷を遂げています。たとえば若者言葉、いわゆる「ネオ京ことば」は、私たちがかつて耳にした言葉と随分変わってきています。

生活の知恵から生まれた通り名の歌

昔は小学校6年生を終えすと、中等学校に上がる人は限られていました。皆、京都へ丁稚奉公にやられました。京都は碁盤の目になっていきますから、特に遠くから来た人は、どちらを向いていいのか初めは分かりません。「上ル、下ル」と言われても、通りの名前も、まだはっきり分からない。そのとき、通り名を歌に詠み込んで覚えたいですね。これは大変便利です。いつ頃からかと申しますと、神沢貞幹（かんざわ・ていかん）という京都町奉行の与力が江戸時代におりました。この人が遺した文献に『翁草』（おきなぐさ）という書物があり、その中に出てくるのが恐らく一番初めでしょう。

「鞍や寺」（鞍馬口、寺之内）ではじまり七条通りまで、東西の通り名を記しています。

京都市内の東西の通り名を読み込んだ最も有名な歌は、次のようです。ちょうど京都御所の南に通る丸太町通りから数えています。まず北の方から、丸太町の「まる」を取る。その次の通りは竹屋町、「たけ」を取って「まる（丸太町）たけ（竹屋町）えびす（夷川）に（二）条 おし（押小路）おいけ（御池）、あね（姉小路）さん（三）条 ろっかく（六角）たこ（蛸薬師）にしき（錦小路）。続いて「し（四）条 あや（綾小路）ぶつ（仏光寺）たか（高辻）まつ（松原）まん（万寿寺）ごじょう

（五）条」。それから「せった（雪駄屋町）ちやらちやら（鍵屋町）うおのたな（魚棚町）ろくじょう（六）条）さんてつ（三哲）通り過ぎ、ひつちょう（七）条）越えればはつ（八）条）くじょう（九）条」。そして「じゅうじょう（十）条）とうじ（東寺）でどどめさす」。便利ですね。丸太町通りから東寺まで、歌に詠み込んでいるんです。

これはまた、別の歌もご紹介します。「ほんさん頭は丸太町、つるつとすべて竹屋町」。さらに、南北の通りを読み込んだ寺町から始まる歌もあります。「寺、御幸、麩屋、富」（寺町、御幸町（ここまち）、麩屋町（ふやちょう）、富小路）。でも、節回しは失われました。これは「浄福、千本、はては西陣」で終わっています。かつては、こういう歌を皆覚えていたものです。

21世紀に残したい京ことばベストテン

2000年頃でしたか、NHKが「21世紀に残したい ふるさと日本のことば」という特集番組を作るにあたり、私が京都府の監修を依頼されました。このとき京都放送局が京都語について、世間一般の人がどういう言葉を残してほしいと思っているのかアンケート調査を行いました。そのベストテンをご紹介します。

10位が「ほんなり」。アクセントは「ほんなり」か「ほんなり」かと、よく質問されますが、だいたい舞妓さんは「ほんなり」です。こういう4モーラ（※MORA II拍）といいますか、4音節というか、言葉が長いほど揺れます。アクセントは個人

差も出ますし、地域によっても揺れてきます。だいたい南へ下ってくる。「はんなり」と言う人が多くなりますね。

5位は「ほっこりする」。農作業や重労働をしてきた人などが疲れて帰ってきて「ああ、ほっこりしたわ」。そういう時に使った言葉としてランクインしています。しかし、今はそういう意味で使わなくなりました。どこかの喫茶店で「くつろぐ」という意味。若者が意味のニュアンスを変え出した言葉の一例です。話はそれますが、「まつたり」という言葉も今は使う意味



講演会場の風景

が違ってきています。昔は料理用語でした。梅酒なども2、3年経ちますと、こくのある穏やかな味になりますね。そういう、とろーとした味わいを「まつたり」と言った。ところが最近、若者は「もう明日は休みやし、家でまつたりしようや」という使い方をします。その意味で

全国的に広まり、かつての意味がだんだんと失われています。

第3位は「おはようお帰り」。平穩無事で早く帰ってくださいるようにという意味を込めています。庶民の家ではよく使いましたが、祇園では、舞妓さんや芸妓さんを送り出す時はこれは言いません。単に「行つといない」と言うだけです。なぜですかと祇園で尋ねると、それさうでしよう先生、うちは商売しております。「おはようお帰りやす」と言つて早く帰られては困る、ようきばつてもらわなあかんのやと。第2位は「おやす」形式で、二つあります。「おいでやす」と「おこしやす」。両者のニュアンスの差はどういう点にあるのか。祇園の舞妓さんの意識では、「おこしやす」の方が「おいでやす」よりも上品ださうです。

そしてトップが「おおきに」。これが使われ始めたのは、だいたいの江戸時代後期の後半、幕末ちよつと前くらいからです。本来は、それ以前から「おおきに」と「おおいに」という言葉がありました。「おおきに何々」という使い方がありますね。平安時代「ありがとう」と言えは、在る、存在することが困難なもの、在り難きものという意味でした。今のような感謝の意味で使い出したのは室町時代で、初めの頃は神様や仏様に対する感謝の気持ちを込めて「ありがとう」と言っていました。それが室町時代の後半になると、意味が庶民の家に広まってきました。そして江戸時代になって、今のよう一般的に感謝の気持ちという意味で使い始め、広まっていったのです。

しかし、その感謝の気持ちを「もつ」と表したい。「Thank you」だけではなく「very much」を付けたい。そういう意識が働いてきました。そこで江戸時代後期になると、「おおきに」おられた内親王様方が天皇陛下と一緒に京都御所にお住みになり、京都の御所の言葉をお使いになっておられた。その内親王様が尼僧になられ、小さい時から代々入つてこられたお寺です。だから、京都御所の言葉をずつと伝えてきた。私は何度もここへ通つて京都の御所の言葉を教えてもらいました。一番偉い方である御前もそうですが、とくにお付きの方がよく知つておられました。御前もお付きの方も先代から御所の言葉のしつけを厳しく受けてきましたので、自然に出る。私が行きましても、電話でも、朝昼晩の挨拶は必ず「こきげんよう」。お別れする時も「こきげんよう」。宮中の女官の方からも聴取しましたが、これはほとんど変わらなかつたです。昭和30年代のことです。その他、堀川にある人形寺で有名な宝鏡寺というお寺も調べさせてもらいました。そこのお寺の御前は花山院慈薫（かさんのいん・じくん）さんという方、元侯爵家の方です。その方が、あとで大聖寺へお入りになりました。他にも嵐山の渡月橋近くにある曇華院（どんけいん）、東山の靈鑑寺、奈良の中宮寺という門跡寺院でも御所の言葉が使われていました。いま挙げたような京都のお寺と中宮寺とは、言葉はちよつと違います。しかし、中宮寺では大聖寺の言葉をお手本にしているというこ

を付け出したんです。「おおきに、ありがとう」。しかし長い言葉は縮小していきます。「ありがとう」を省いて、「おおきに」だけが残つた。これが江戸時代後期の後半頃から広まり出したわけです。ちなみに京都の御所では「おおきに」は使いません。「おおきに」がこのように変化したケースは、全国的に見ると幾つかあります。中国地方西部や、一部は九州や四国にかかると幾つかあります。この地方では「おおきに」に相当するものとして「だんだん」と、今でも言います。「だんだん、ありがとう」の「ありがとう」を省いて、「だんだん」だけが残つた。「おおきに」と同じ心理ですね。東北のある地域では、同じ意味で「かぶん」とか「かんぶん」と言います。「過分にありがとう」の「ありがとう」を省いたものですが、これはだんだん減んでいくでしょうね。

今は使われないけれども、室町時代や江戸時代や、もつと前の鎌倉時代に京都で使っていた言葉が日本の端々で残ってくる。大変、面白い現象だと思います。

御所ことばの残る京都の尼門跡寺院

京都の御所の言葉はどうでしょうか。今出川ギャンパスの近くにある冷泉家では、お公家さんの言葉を伝承されてこられました。そして私が昭和30年代を中心に調べたところ、ちよつと同志社大学の西側、烏丸通りを挟んで向かい側にある大聖寺（だいしやうじ）という尼門跡寺院では、宮中とほとんど変わらない御所の言葉を保存しておられたんです。

大聖寺は尼門跡では宮中席次第一位です。むかし京都御所に

そういう尼門跡寺院を調査し、合わせて宮中の女官さんたちの言葉も調査したわけです。日記も残っています。たとえば『統群書類従』補遺の中にある『お湯殿の上の日記』。お上を中心とする出来事が書かれていますので、昔は極秘扱いだつた書物です。部分的に失われた箇所もありますが、ちよつと応仁の乱があつた頃から文化文政の頃までずつと書き継がれてきた日記

ですね。ただし漢字がところどころに混ざっている程度で、ほとんど平仮名表記です。原本には句読点がまるでなく、どこで切るのか分からぬ。濁点が付いていないから、どこで濁るのか、どう澄むのか難しい。そして御所の言葉がところどころに出てきますので、これを知らないといふと、まず読めません。広辞苑にも日本国語大辞典にも載っていない単語も出てきます。そういうわけで、私は日本語を研究する時に非常に貴重な文献だと思っています。

ただし平仮名表記は逆に、どう発音したかも分かるわけですね。たとえば「天文」という元号は「てんもん」ではなく、「てんぶん」と読みます。改元の記事のその日の日記を見れば、「てんぶん」と書いてある。人名、女官さんの名前、お公家さんの名前なども文書を見ていただけでは分かりませんが、ときたま平仮名で書いてくれているので、ありがたいです。

（京都の御所ことばと御所から將軍家の大奥へ、そして庶民に広まった言葉）

さて京都の御所では、実際にどのような言葉が使われていたのでしょうか。尼門跡にお正月に行った時、それが少し分かりました。御前が下の者に言う場合と下の者が言う場合とでは、多少は違います。この身分差による使い分けも難しいのですが、卑近な例で申しませう。我々庶民が御前に向かって「お餅を網で焼いてくださいませ」と、下から上へお願いするときは、それを御所の言葉で言うと、こうなります。「御前、恐れ入りますが、おかしんをあもじでお火取りあそばしていただきませう。だいたい人にものを頼む時、宮中の人は昔から「恐れ入りま

すが」を入れたものです。「おかしん」は餅。これは室町時代からの言葉で、今も残っています。「あもじ」は網、これは「文字詞（もじことば）」と申します。そして焼くと言わず、「火取る」。「あそばすことば」を使って「お火取りあそばしていただきませう」といいます。尼門跡ではよく、逆に質問されることがあります。「先生、町方ではどう言いますか」と。そのくらい、尼門跡の方々は御所の言葉による生活をずっと続けてきたわけですね。

御所ことばは、幕府の將軍家でも使われていました。足利幕府と京都御所とのお付き合いは頻繁に行われていましたので、將軍家の大奥では京都の御所の言葉を使っていました。江戸の將軍家、8代將軍徳川吉宗の大奥でも使われていた証拠があります。アクセントはどうであつたか分かりませんが、吉宗の次男の田安宗武という方がお書きになつた『草むすび』という本に出てきます。たとえば今でも皇室でお使いになっている「おかべ」とは豆腐のこと。「草むすび」の説では、壁の色に似ているからと書いてあります。皆さん、お水のことを「おひや」と言いますね。これは江戸の大奥あたりか、お屋敷に奉公する人が広めてきた言葉です。

（文字詞、重ね言葉に忌み言葉。身分による使い分けもある御所ことば）

さて、京都の御所で使われていた言葉には、いわゆる文字詞（もじことば）が多くあります。今もかつらのことを「かもじ」と言いますね。「くもじ」という言葉は、いろんな意味がありました。その中でよく伝わつたのはお漬物。首、公事、お酒の使い分けが難しいです。

御所では忌み言葉もあります。たとえば「血」は忌み言葉なので「あせ」と言う。汗が出て血が出て「あせ」。平安時代からそうですね。猫が死にましたと言わず、「あの猫、落ちました」と言う。金魚が死ぬことは「あがる」。死に関する言葉も忌み言葉です。

正月三が日の忌み言葉もあります。天狗という言葉は正月三日に使うと祟りがあるということで、「ものものさん」と言います。もし、うっかり天狗と言ってしまった時は、取り消す方法があります。天狗は火に祟るといふことで、火に対しては水。「水、水、水」と3回言えば帳消しになるそうです。大聖寺では、ねずみという言葉も正月三が日は使いません。いかにも宮廷風らしく「かの人」と言います。

焼き豆腐は「焼き」に対して「豆腐」だから「やきおかべ」という方が普通だと思いますが、「やきかべ」です。「お」を付けない方が雅な言い方だそうです。文化庁や国立国語研究所などから敬語の本がたくさん出ていますが、こんな細かいことは書いていません。御所の言葉が敬語の基本になっていると思えますが、「お」の付け方というのは難しいと思えます。

（皇室でも失われた「ふれことば」京都で失われ、周辺部に残る京ことば）

宮中では「ふれことば」というのがあります。朝、天皇陛下がお目覚めになると、女官が長い廊下をふれて歩く。これがもう、恐らく失われたと思います。「申しようー、お昼でおじゃーと、申させたまうー」

や宴会のこと「くもじ」と言いました。

ところが、一回限り使うという例があります。これは辞書には登録されません。「ながはしより、くもじのかもじこしらえてまいる」という文がありました。ながはしはお局さん。「くもじのかもじ」と、もじが2回も出てきます。よく読んでみると、その前のあたりに「くりのちんこしらえてまいる」と書いてある。その時の「くもじ」は粟、「かもじ」はかちんのこと。だから栗餅なんです。これは辞書に登録されません。人名にまで「もじ」を使うことがあります。これら簡便な使い方が固定していき、民間に広まったのもあれば、一時限りのものもありました。食べ物関係だけでも、少し申しあげませう。

江戸時代は団子のことを、おいしいの「いし」を二つ重ねて「いしいし」と言いました。重ね言葉ですね。室町時代の古い文献に出てきますが、蒲鉾は板の上に乗せまうから「おいいた」となります。

自分のものを指す場合と目上に対して言う場合とで、違う言葉もあります。たとえば、ご飯。自分のは「はん」とだけ言いますが、相手または目上の人に対しては、濁って「おばん」と言います。「おばんを召し上がりませうか」と。茶碗や皿も、宮中では自分のものに「お」を付けてはいけません。相手のものには「お」を付ける。それも、色々な言い方があるから難しいですね。

お公家さんでも、上の方の人と中流以下のお公家さんとは言い方が違います。どこそこへいらつしやるといふのを、天皇陛下や身分のうんと高い方に対しては「ならしやる」を使います。お公家さんとか下の位の人は、「こわしやる」と言う。こ

「お昼」は、お上が起床されることを指す「お昼なる」という動詞から来ています。つまり「これから申し上げます、天皇陛下がお目覚めあそばされましたよ」ということですね。もう一つ、「ご飯ですよ」は、今と同じ節回しでこう言います。「申しようー、おなか入れておじやーと、申させたもうー」。京都の尼門跡などでは幸い、まだ昔の生活を続けておられますが、京都以外ではあと20年もすれば、こういう言葉は過去の話になってしまうのではないのでしょうか。

失われつつある言葉に、もう少し触れましょう。京都市内ではまだ残っていますが、周辺部では、ゆで卵を指す「煮ぬき」も使われなくなってきました。お正月に揚げる凧は、昔は「いか」と言いました。江戸時代の文獻『物類称呼』（ぶつるいしようこ、1775年刊）に「江戸ではたこと言い、上方ではいかと言う」と書いてあります。私の祖母は文久元年の生まれで、「いか」と言っていました。私は小学校入る前から「もういくつ寝るとお正月には凧揚げて」という歌を知っていましたから、「たこ」も「いか」も両方知っていた。あの歌が流行り出してから「たこ」が全国区になったんです。ところが、学研都市付近には「いか」が残っています。かつての京ことばだったものが、まだこのへんに残っているのです。

京都の真ん中で使わず、周辺部で使われている言葉はまだあります。八瀬大原や学研都市付近で、特に年配の女性は「私」というのを「こち」と言います。これは古い言葉で、御所でも「こち」と言いました。御所の言葉といえば、「たもれ」は、花背、大原あたりでまだ使われています。花背などへ行っておばあちゃんに話を聞きましたら、先生何々したもれと、まだ使

います。「たも」とも言う。ですから単に古い京ことば、京都語を研究するといつても、その周辺部との関係を調べて比較してみることが大切ではないかと、私は考えています。

書き残さない失われる言葉がある。
そして『京都府ことば辞典』の誕生

NHKの「21世紀に残したいふるさと日本のことば」の京都府の監修を依頼されたとお話ししましたが、京都府といっても非常に広い地域です。北は伊根町、京丹後市、峰山、久美浜などの丹後半島。あの一帯は東京アクセント型の地域です。それからずっと南下しますと、福知山あたりは少し混ざってきます。それから京都市内があり、ここから南はほぼ京都アクセント地域。南北に長い京都の中で京都語があり、その周辺部もまた違っています。

10年ほど前に京都府庁から委託されて、今の学研都市付近の言葉を調べた時も、書いたものが非常に少ないんですね。八瀬大原、高雄、岩倉、花脊、中川、鞍馬の一帯も、ほとんど調べられていません。記録がない。大原などは特に歴史的に有名な地ですが、大原方言なんて分からない。今となっては遅きに過ぎるものがありました。わたたくしたち調べまして、このたび『京都府ことば辞典』を作りました。もちろん今の京都語も入っていますが、全体的なことがよく分かるように、丹後半島から南山城村にいたる、色々の地域の主な言葉を取り上げて辞典にまとめたものです。京都語は別として、いわゆる京都の方言が京ことばに対してどういう位置付けにあるかがお分かりいた

だけるのではと思います。記録されなかったために失われ行く言葉がたくさんあります。いつでもできるようなことは、人はしないものです。ですからいま使われている京都の言葉も、ぜひ書き残してほしいものです。

(2006年10月11日、女子大学学芸学部・日本語日本文学科公開講座での講演。新島記念講堂)

〈表1〉

21世紀に残したい京ことばベストテン	
1位	「おおきに」
2位	「おいでやす」「おこしやす」
3位	「おはようお帰りやす」
4位	「よろしう おあがりやす」
5位	「ほっこりする」
6位	「かんにんえ」
7位	「はばかりさん」
8位	「おきばりやす」
9位	「おたのもうします」
10位	「はんなり」

〈表2〉

御所ことば		
重ね言葉	あられ	いりいり
	団子	いしいし
	数の子	かずかず
	するめ	するする
文字詞	ぼた餅	やわやわ
	寿司	すもじ
	海老	えもじ
	鯖	さもじ
「お」の付く言葉	たこ	たもじ
	漬物	くもじ
	網	あもじ
	相手の帯	おもじ
その他	餅	おかちん
	豆腐	おかべ
	魚	おまな
	魚屋	おまなや
	蒲鉾	おいた
	味噌	おむし
	米	およね、うちまき
	相手のご飯	おばん (自分のご飯は「はん」)
	紅髪	おいろ
	お金	おたから
その他	大根	からもん
	牛蒡	ごん
	素麺	ぞろ
	つくし	つく
	こんにゃく	にゃく
	ちまき	まき

堀井 令以知 氏
(ほりいれいいち)

略歴
1925 (大正14) 年京都市生まれ。49年京都大学文学部 (言語学専攻) 卒業。54年京都大学旧制大学院研究奨学生後期終了。現在、関西外国語大学大学院教授、新村出記念財団理事長。76年フランス政府より功労国家勲章を受ける。

主な著書は『京都語を学ぶ人のために』(世界思想社、2006年)、『ことばの由来』(岩波新書、2005年)、『一般言語学と日本語学』(青山社、2003年)、『京都府ことば辞典』(編著、おうふう、2006年)、『上方ことば語源辞典』(編著、東京堂出版、1999年) ほか多数。